

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月23日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530741

研究課題名（和文）がん医療現場の臨床心理士とがん患者会の協働を促すコミュニティ心理学的試み

研究課題名（英文）A Community Psychological Study on Collaborations between Clinical Psychologists and Cancer Survivors' Self-help Groups

研究代表者 児玉 憲一（KODAMA KENICHI）

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：10186702

研究成果の概要（和文）：がん医療現場の臨床心理士とがん患者会の協働を促すための方法をコミュニティ心理学の立場から検討した。まず地域のがん患者会をセルフヘルプ・グループととらえ、内外の研究を展望した。次に全国のがん患者会対象に質問紙調査を行い、119 団体のうち 3 割で臨床心理士との協働が行われており、その方法や今後への期待等が明らかにされた。最後にすでに協働中の臨床心理士対象の面接調査を基に、協働をさらに促す方法が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to explore methods to activate collaborations between self-help groups for cancer survivors (SHGs) and clinical psychologists in medical fields (CPs). Firstly, the previous studies on SHGs were reviewed. Secondly, a questionnaire was sent to 265 SHGs to clarify collaborations between SHGs and CPs. The results suggested that only a few SHGs had collaborated with CPs although most leaders of SHGs expected supports from CPs. Finally, a survey using semi-structured interviews with CPs collaborating with SHGs were conducted. The results showed many and flexible ways of collaborations between SHGs and CPs.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：①がん医療 ②緩和医療 ③臨床心理士 ④がん患者会 ⑤セルフヘルプ・グループ ⑥コミュニティ心理学

#### 1. 研究開始当初の背景

わが国の死因第一位を占めるがんの対策を総合的かつ計画的に推進することを目的に「がん対策基本法」が2006年6月に制定されるにあたって、当事者団体であるがん患者会・家族会（以下、がん患者会）の活動が大きな役割を果たした。同法を具体化するために2007年6月に策定された「がん対策推進

基本計画」では、がん患者会の果たすべき役割が明記された。一方、がん治療の拠点である国や地方自治体のがんセンターやがん治療地方連携拠点病院（以下、がん拠点病院）の緩和ケアチームに、多くの臨床心理士（以下、心理士）が参入している。しかし、がん患者会と協働する心理士の数は少なく、そのことががん患者や家族に心理士の存在が認

知されにくい一因となっていた。心理士ががん医療及び緩和医療（以下、がん医療）の分野で活躍するうえで、心理士とがん患者の協働を活性化することが喫緊の課題と考えられた。

研究代表者らは 2003～2005 年度の科研基盤研究 (C)「先端医療が生み出す心の問題への臨床心理学的援助の研究」で行った全国調査 (兒玉, 2007) で、HIV 医療や周産期医療と比べてがん医療の心理士には研修機会が少なく職業的ネットワークの形成も不十分であることが明らかにした。そこで、研究代表者らは、2007～2009 年度の科研基盤研究 (C)「がん医療現場の臨床心理士支援のための病学連携の試み」で、臨床心理士養成大学院 (以下、大学院) 教員の立場から、がん医療現場の心理士の研修機会を増やし、職業的ネットワークの形成を促すため、シンポジウム、ワークショップ、事例検討会等の開催、HP やメーリングリストの運営などを行い、一定の成果をあげた (兒玉・栗田・品川・中岡, 2008)。しかし、心理士のがん患者会へのかかわりは少なく、がん患者・家族の心理士に対する認知度は依然として低いままであった。

#### (引用文献)

兒玉憲一, 先端医療に従事する臨床心理士の現状と課題, 心理学ワールド, 36, 2007, 5-8

兒玉憲一・品川由佳・内野悌司, がん医療現場の心理士の業務と研修に関する調査, 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター紀要, 6, 2008, 129-137

## 2. 研究の目的

本研究では、がん医療現場の心理士とがん患者会の協働を促すため、大学院教員の立場から心理士及び患者会双方にコミュニティ心理学的な調査を行い、協働の可能性を具体的に模索し、協働を支援する方法を明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の4点を明らかにすることを目的とした。

①わが国のがん患者会は、心理士をどのような認識し、どのような協働への期待を持っているか。

②すでに協働しているがん患者会と心理士は、どのような協働の形態や過程を示しているか。

③いまだ協働していないがん患者会及び心理士に協働を促すには、どのような支援が有効か。

④本研究終了後も協働を継続的に促すための支援体制をどのように構築するか。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究1の方法

本研究では、がん患者会に関する心理学的

研究を行うため、がん患者会を地域におけるがん患者によるセルフヘルプ・グループ (SHG) と認識し、調査研究に先立ち、がん患者の SHG に関する内外の研究を広く検索・展望した。具体的には、日本語文献は、「がん患者」、「がん患者会」、「セルフヘルプ・グループ」、「自助グループ」等をキーワードとし、データベース Citation Information by NII (CiNii) で検索した。英語文献は、“cancer patient”, “self-help group”, “peer support group”等をキーワードとして、データベース PsycARTICLES, CancerLit, PubMed, PsycINFO で検索した。その結果、2000 年以降でヒットした約 300 本の論文のうち、要約や abstract を基に本研究の目的に直接に関連した論文 27 本 (日本語 9 本, 英語 18 本) の full text を分析対象とした。

### (2) 研究2の方法

目的①②③をがん患者会サイドから明らかにするため、全国のがん患者会の活動状況及び心理士との協働の現状について、がん患者会 265 団体を対象とし、2011 年 12 月～2012 年 2 月に郵送法で質問紙を配布回収し、119 通の有効回答 (有効回答率 44.9%) を分析対象とした。質問 1 で、患者会の名称、所在地、会員数、構成メンバー、運営委員会の有無、活動内容、活動場所を尋ねた。質問 2 で、心理士が会の活動に参加したか、参加の場合はその立場や役立った点を、不参加の場合は今後の希望を尋ねた。質問 3 で、患者会と心理士の橋渡しに関する希望を尋ねた。

### (3) 研究3の方法

目的②③④を心理士サイドから明らかにするため、すでになん患者会と協働している心理士 5 名に対し、訪問面接調査を行った。事前に質問紙調査を郵送法あるいはインターネット上で行い、その結果を基に面接ガイドを作成し、それに従い半構造化面接を個別に約 1 時間行った。事前の質問紙及び面接ガイドの主な内容は、①会の概要 (会の名称、活動場所、メンバー、主な活動)、②会とのかかわり (参加したいきさつ、会に貢献したこと、自分に役立ったこと、心理士に協働を促す方法) であった。面接は IC レコーダーで録音され、逐語記録が作成された。

## 4. 研究成果

### (1) 研究1の研究成果

研究1の詳細な成果は黄・館野・山村・岩田・兒玉 (2010) に譲り、その概要を以下に述べる。まず、入院中のがん患者を対象とし医療者主導で心理教育プログラムを行うサポート・グループ (SG) に関する研究は内外ともに非常に多い一方で、地域におけるがん患者の SHG 研究は少ないことが明らかになった。とりわけ、わが国における地域のがん患

者会に関する学術的な研究論文はわずか9本で、しかもその多くは看護学的な研究で、心理学的な学術論文は見当たらなかった。一方、海外のがん患者のSHGに関する18本の研究論文の多くが半構造化面接に基づく質的研究であった。そこでは、患者会のSHGとしての援助機能として、①医療情報や知識の獲得、②病気の受容の促進、③集団への帰属感の増大、④孤立感の解消、⑤コーピング能力の向上、⑥アイデンティティの再確立、⑦エンパワメントの向上、⑧ソーシャルサポートネットワークの獲得などが明らかにされた。ただ、SHGの援助機能に関して十分に説明できる理論やモデルはいまだ導き出されていなかった。したがって、それぞれのSHGがもたらす援助効果がメンバー間で異なるのか、もし異なるならばそれを規定する要因は何か等を明らかにすることはできていなかった。今後の課題として、SG研究を参考としてSHG研究でも量的研究の方法が開発され、質的研究と量的研究の統合が求められていることが明らかになった。

### (2) 研究2の研究成果

質問1で全国のがん患者会119団体の代表者に会の活動状況等を聞いたが、ここではその結果は黄・中岡・兒玉(2012)に譲る。

質問2で全国のがん患者会と心理士のかかわりを聞いた。その概要は以下の通りであった。①会の活動に心理士が参加したことがあるのは119団体のうち36団体(30.3%)だった。実際に協働している心理士の名前も明らかになった。②上記団体で心理士がどのような立場で参加したか聞いたところ、「専門家(の講師)として」が36団体中24団体(66.7%)と最も多く、次いで「(自らの)研究や研修のため」が13団体(36.1%)、「ボランティアとして」11団体(30.6%)の順だった。③心理士がどのように役立ったか聞いたところ、「メンバーの話をよく聴いてくれた」が36団体中18団体(50.0%)と最も多く、次いで「専門的な知識やスキルを教えてくれた」17団体(47.2%)、「裏方で運営を助けてくれた」13団体(36.1%)の順だった。傾聴や裏方で会に役立っているのは心理士の特徴といえる。④心理士が参加したことのない団体に、どんな立場での参加を希望するか尋ねたところ、「研修会の講師担当」を希望するのが88団体中48団体(57.8%)と最も多く、次いで「会員のカウンセリング担当」36団体(43.4%)、「役員の相談相手」21団体(25.3%)、「特に希望なし」18団体(21.7%)の順だった。⑤同じく83団体に、心理士にどんな役割を期待するか尋ねたところ、「専門的な知識やスキルを教えてくれる」が55団体(66.3%)と最も多く、次いで「メンバーの話をよく聴いてくれる」49団体(59.0%)、「役員の相談に乗ってくれる」24団体

(28.9%)の順だった。いまだ心理士が参加したことのない会のうち6割で、「講師のとして知識やスキルの提供」および「カウンセラーとして傾聴」を期待していることが明らかになった。⑥患者会と心理士の橋渡しのためにどのような方法を希望するか尋ねたところ、「現場の心理士の情報を患者会に提供してほしい」が119団体中60団体(50.4%)と最も多く、次いで「最寄りの都道府県の心理士会の情報を患者会に提供する」48団体(40.3%)、「最寄りの現場の心理士に患者会の情報を提供してほしい」33団体(27.7%)の順で、会としては最寄りのがん医療現場で働く心理士の情報を最も多く求めていることが明らかになった。

### (3) 研究3の研究成果

すでにがん患者会と協働している心理士のうち事前の質問紙調査と半構造化面接調査に応じてくれた5名の調査結果の概要は次の通りであった。①心理士A氏(40代女性)：自らががん患者となったことで、患者仲間とがん患者会を立ち上げた。また臨床心理士をめざして大学、大学院に社会人入学し資格を取得した。現在は患者会の代表として行政の委員会に参加しがん医療体制の充実に尽力している。心理士はもっと自己の存在を積極的に社会にアピールしてほしいと思っている。②心理士B氏(50代男性)：かつてわが子が小児がんになったことで「がんの子どもを守る会」に参加し、医療情報の提供や遺族として会からのサポートしてもらった。この経験を基に、現在は総合病院の心理士としてがん患者や家族に患者会に紹介したり、がん患者会相互の連携を促すイベントを開催するなどの活動を続けている。③心理士C氏(30代女性)：がんセンター小児科の心理士として、患児の親たちが院内で立ち上げた親の会ができるだけ親主導で運営できるよう不即不離の関係で支援している。具体的には、運営メンバーの話の聞き役をしている。心理士としては親の会が親たちのためだけでなく病院にとってもプラスになることを目指すスタンスを大切にしている。④心理士D氏(80代男性)：長年の心理士としての様々な臨床経験を活かし、地域のがん患者会に専門ボランティアとして自発的に参加している。会に貢献しているというより、会員から人間としての生き方を学んでいる面が強い。心理士には病院だけでなく在宅医療の分野で活躍してほしいと願っている。⑤心理士E氏(30代男性)：最初は修士論文の研究目的で患者会にボランティアとして参加した。その後、多くの患者会代表者の協力を得て、がん患者会の自己評価や自己点検に役立つコミュニティとしての会の援助機能評価尺度(黄・兒玉, 2012)の開発をめざし、全国のがん患者会の調査を続けている。患者会メンバーは高齢者

が多いので、若い心理士ボランティアとして患者会に貢献できることは多いと思っている。

上記5名の心理士は、会への参加動機や会での立場や活動内容はそれぞれ異なっていたが、心理士が各会で果たす役割については共通した認識があった。すなわち、心理士は、がん患者会の会員同士の間、医療従事者と会員の間などさまざまな人々をつなぎ、裏で支える「縁の下の力持ち」「黒子的存在」であるといった点は共通していた。研究3の成果は、近々学術論文として発表する予定である。そこでは、3年間の研究成果を基に、がん患者会代表者および心理士を対象とした協働を促すマニュアルも提示する予定である。

(引用文献)

黄正国・館野一宏・山村崇尚・岩田尚大・兒玉憲一、がん医療におけるセルフヘルプ・グループ研究の展望、広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域、60、2011、187-193

黄正国・中岡千幸・兒玉憲一、がん患者会代表者のコミュニティ援助機能評価とベネフィット・ファインディングの関連、広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域、61、2012、149-158

黄正国・兒玉憲一、がん患者会のコミュニティ援助機能とベネフィット・ファインディングの関連、Palliative Care Research、7(2)、2012、225-230

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

黄正国・兒玉憲一、がん患者会のコミュニティ援助機能とベネフィット・ファインディングの関連、Palliative Care Research、査読有、7(2)、2012、225-230

黄正国・中岡千幸・兒玉憲一、がん患者会代表者のコミュニティ援助機能評価とベネフィット・ファインディングの関連、広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域、査読無、61、2012、149-158

兒玉憲一・小池眞規子・笠井仁・服巻豊、臨床心理士養成大学院間連携による緩和ケア卒前・卒後教育プログラムの構築の試み、広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要、査読無、10、2011、60-72

黄正国・館野一宏・山村崇尚・岩田尚大・兒玉憲一、がん医療におけるセルフヘルプ・グループ研究の展望、広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域、査読無、60、2011、187-193

[学会発表] (計5件)

黄正国他、がん長期生存者用ベネフィット・ファインディング尺度の作成、日本サイコオンコロジー学会総会、2012年9月21日、九州大学医学部百年講堂・同窓会館

黄正国他、がん患者会のコミュニティ機能とがん患者におけるBenefit Findingとの関連、日本心理臨床学会第30回秋季大会、2011年9月3日、福岡国際センター

栗田智未、60歳代再発癌女性との面接過程—病気を知る怖さから死を受容するまで—、日本カウンセリング学会第44回大会、2011年9月18日、上越教育大学

黄正国他、がん患者会のコミュニティ機能、Benefit Finding、QOLとの関連、第24回日本サイコオンコロジー学会総会、2011年9月29日、大宮ソニックシティ

兒玉憲一他、緩和ケア(病棟)における心理臨床について(その9)、日本心理臨床学会29回大会、2010年9月3日、東北大学

[図書] (計1件)

岡本祐子・兒玉憲一(編)、ミネルヴァ書房。心理学の世紀4 臨床心理学、2012、599(149-168)

[その他]

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/r740532/bridge/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

兒玉 憲一 (KODAMA KENICHI)  
広島大学大学院教育学研究科・教授  
研究者番号：10185702

### (2) 研究分担者

磯部 典子 (ISOBE NORIKO)  
広島大学保健管理センター・准教授  
研究者番号：80335695

品川 由佳 (SHINAGAWA YUKA)  
広島大学大学院教育学研究科・助教  
研究者番号：80403517

(H22のみ)

栗田 智未 (KURITA TOMOMI)  
広島大学保健管理センター・助教  
研究者番号：90467788

荒井 佐和子 (ARAI SAWAKO)  
広島大学大学院教育学研究科・助教  
研究者番号：20510900

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

黄 正国 (HUANG ZHENGGUO)  
広島大学大学院教育学研究科博士課程後期・大学院生